

【寄稿】語学学習と留学～私の体験から 文学部教授 三浦 弘(昭56文)



留学経験は人生における心の糧になり得るものです。しかし、留学中は楽しいことばかりではありません。外国暮らしの不自由さを乗り切るには自己の目標が必要です。明確な目標がなければ、留学生活は不平に満ちた怠惰なものになってしまいます。

イギリス人学生が同じ英語圏のアメリカへ留学してもカルチャーショックに遭うわけですから、外国の習慣になじめるかどうかは、語学

力だけでは判断できません。ところが、語学力向上のための事前の努力もかなり要求されます。留学先ではその国の言葉がある程度自由に話せなければ、学生同士でも対等のつきあいができないからです。人によって、楽しみでもあり、億劫でもあり、苦痛でもある、外国語学習に留学以前に励まなければならないのです。

学生の場合、語学力を伸ばすことそのものが留学の目標にもなります。例えば、留学前にTOEFLを難しいと感じても、長期留学を終えてみたら、そのリスニング問題は留学先のキャンパスで直面したことのある状況ばかりで易しく思えるでしょう。そのような成果は留学前に相当な努力をした人だけが得られるものです。

私の場合、今回の相馬学術奨励基金による留学では、数年来の懸案であった「日本語アクセントとプロソディーの発出と認知」という260ページになった英語論文を書き上げることがだけが目標でした。ロンドン大学に研究室をお借りしながら、観光名所に足を踏み入れたのは、帰国直前にお土産を探しに、キャンパスのすぐ南にある大英博物館の売店へ一度行ったきりでした。ハワイへ留学して一度も海岸へ出かけなかった人もいるように、留学というのは厳しいものです。

私とロンドン大学との縁は、音声学科の大学院へ学生として留学した1989年から始まります。この学科は長い伝統を持つイギリス音声学の本拠地です。『マイ・フェア・レディ』のヒギンズ教授の真のモデルであった初代主任教授ダニエル・ジョーンズ、二代目ギムソンに次ぐ、三代目のウェルズ教授に師事しました。その時の目標は学位を取るだけでした。その目標がなければ、ロンドンに長く住むことなどできませんでした。ウェルズ教授には今回の受け入れ指導教授もお願いしました。

振り返ってみると、音声から言語へのアプローチは私に適していたようです。学生時代、英米文学科に在籍し、本を読むことは隙でしたが、英単語の暗記などは面倒でした。水谷弘先生(商学部教授)の教養演習と課外サークル「現代英語研究会」に所属していた関係で、当時生田キャンパス2号館2階にあったLL教室のテーブルを片っ端から聴くことができました。

卒業後8年間、高校の英語教員を務めました。外国語は教えてみてはじめて、理解が深まるような気がしました。そして、ようやく自分の研究がしたいと思うようになり、イギリスへ渡りました。

この13年間でロンドン大学の最も大きな変化は学内のコンピュータ化です。授業のプリントや講義内容のマニユスクリプト(未発表論文)は、教室での配布でも、学科ライブラリーでの自主的なコピーでもなく、すべて、授業前に電子メールで添付送信されます。

街に電化製品や文房具等の日本製品があふれている様子も、以前とは異なります。しかし、日常生活はあまり変わらず、イギリス人は質素な国民だと思います。クリスマス・ライトにしてもかつては北国の世を彩る楽しみで、華やかだと思って見ていましたが、今では日本の方がずっと派手になったので、ロンドンで毎年注目されるリージェント通りのライトも質素に見えてしまいます。

留学について漠然とした憧れを抱いている方には、国際交流センターの短期プログラムをお勧めします。海外生活を経験することで、視野が広がり、自己の目標も見えてくると思います。それから長期留学に備えて計画的に準備をすれば、きっと成功する

でしょう。

[8月15日/ニュース専修10面]

## 【寄稿】リュミエール・リヨン第2大学に1年間学ぶ 田宮佑美枝（経営4）



私は、01年度外国留学生として昨年2月から約1年間、フランスのリュミエール・リヨン第2大学に留学をしました。

リヨンはフランス第2の商業都市であり、近代的なビルが並ぶ街並みがある一方、中世から続く地区が残る歴史的な都市でもあり、住みやすくきれいな街でした。2月から6月までは大学の語学機関でフランス語を、そして夏期休暇をはさんで9月からは大学の正規の

授業を受けました。夏期休暇中にはフランス人家庭でホームステイも体験しました。住居は学生寮で、リヨ市内の大学に通うフランス人学生や海外からの留学生など、男女の区別もなく実にさまざまな学生がいました。部屋は個室で、台所、洗面所は共同でした。そこで多くの人と出会いました。学校では学ぶことができない、若者が使うような口語の話し方、そして小さな喧嘩になっても自分の意志をはっきり伝えること、コミュニケーションをとっていく上で大切なことが寮生活を通じて学べたと思います。

特に仲のよかったフランス人のルーシーとはよく食事や買い物を共にし、また彼女がリヨンを離れる間際の6月、二人で南仏のニースやモナコを5日間ほど旅行もしました。彼女は優しく、彼女が話したことで聞き取れなかったことを、いつも嫌な顔せず言い直してくれました。後期からは中国人のニキータという女子学生と仲良くなり、毎日のように会っては日常のことから将来のことまでいろいろ語り合い、フランス語で自分の言いたいことが何でも話せたような気持ちになりました。

大学では経済・経営学部に籍を置き、自分の専攻であるマーケティングを受講しました。マーケティングの基本的な理論から、企業戦略論までを扱う総括的な内容でした。本来なら最終学年の学生が受講するものでためらいもありました。授業でノートを取ることは非常に難しく、その場で理解が困難でも、ノートを借りたり、自分で参考書を読んだりすることで、授業の内容を把握していました。

その授業の中にグループ・プレゼンテーションがあると知った時は、自分には参加できないはずがないと思いましたが、私と同じ留学生や現地のフランス人学生と組むことが出来、フランスでは成長分野にある男性の基礎化粧品についてのマーケティング研究をしました。店頭価格調査や広告を調べ集め、本番で発表も出来たこと、自分がその中で影響力を持てたことをうれしく思っています。

語学のみを勉強していた前期のころは、大学の授業に参加することに不安を感じていました。しかし、問題があれば自分から積極的に行動することで多くの人から親切に助けてもらい、克服することが出来ました。良い成績を得たわけではないのですが、自分なりの努力で成長することが出来、満足しています。

本当にこの留学の体験がすばらしかったと思うことは、自分自身を見つめなおす一人の時間を持てたこと、多くの友達と出会い、充実した時間が過ごせたことです。そして、これからの自分の可能性を広げてくれる貴重な体験になったのではないかと思います。

〔8月15日/ニュース専修10面〕